The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 八宮の「本心」と薫の「誤解」 : 薫に見る「昔物語」からの逸脱・序章 |
| Author(s) | 中川, 照将 |
| Citation | 詞林. 1997, 22, p. 30-46 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67405 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 八宮の「本心」と薫の「誤解」

## ―薫に見る「昔物語」からの逸脱・序章―

中川　照将

### 一

『源氏物語』に見える数々の遺言には、それを託された人々の心や人生までも呪縛し続ける力が隠されている。例えば、『源氏物語』の始発「桐壺」に見える源氏の母桐壺更衣が桐壺帝に残した遺言[1]がそうである。

女もいといみじと見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきに
　いかまほしきは命なりけり

いとかく思うたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、……

（桐壺1・一六）

死を目前にし宮中を退出しなければならない桐壺更衣は、息も絶え絶えに「聞えまほしげなることを」桐壺帝に告げる。その内容については具体的に描かれていないものの、「光宮の将来の栄達を帝にたのむ」ものであることはまず間違いなく、彼はそれ以後実際に「更衣の遺言にしばられ」[2]続けることになる。ある意味では、光源氏を中心とする第一部と第二部は、物語冒頭に描かれたこの一人の女性の遺言によって方向づけられているといっても過言ではないだろう。これから論じていく宇治十帖でも、その始発となる「橋姫」巻冒頭に、ある一人の女性によって以後の展開を決定づける重要な遺言が残されている。その遺言とは、八宮の北の方のそれである。

権力争いに巻き込まれ、世の中から「さし放たれ」た八宮の唯一の心の拠り所である北の方は、中君の出産直後、その出産を原因に死んでしまう。仕えている女房たちは、産まれてくる子が男の子でなかった上に、北の方までもが命を落とす原因となった中君の誕生を「いでや、をりふし心憂く」などと評し、誰一人として彼女に身を入れて世話しようとしないのだが、唯一八宮だけには北の方の遺言の力が作用する。

限りのさまにて、何ごともおぼしわかざりしほどながら、これをいと心苦しと思ひて、「ただこの君を形見に見たまひて、あはれとおぼせ」とばかり、ただ一言なむ、

宮に聞こえ置きたまひければ、前の世の契りもつらきをりふしなれど、さるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいとあはれと思ひて、うしろめたげにのたまひしをと、おぼし出でつつ、この君をしも、いとかなしうしたてまつりたまふ。

（橋姫6・二五七）

臨終の際、朦朧とする意識の中、女房たちに冷たくあしらわれる中君を不憫に思った北の方は「この君（中君）を自分の形見と思って、大切にしてください」と八宮に訴える。注目すべきは、物語内で彼女の唯一発した言葉が、他でもない中君に関するものであったこと、また、それ以上に彼女の遺言を聞いた八宮が「この君（中君）をしも」大切に育てたという事実にある。確かに、八宮も親である以上、大君も中君も同じように大切に思ったであろう。だが、八宮は宇治十帖物語の始発において、父性をはるかに越えた北の方の〈遺言〉という力によって中君を幸福にしなければならない「使命」を負わされたのだ。以後、八宮のすべての行動は、その「使命」の遂行という目的のもとに収束されることになる。

## 二

そんな宇治の世界に出生の秘密を背負った一人の男性が現れる。それが薫だ。薫は冷泉帝と阿闍梨の会話から「俗ながら聖」である八宮という存在に興味を持ち交際を求める。一方、不遇の人生を歩んだ八宮の方も阿闍梨から薫の申し入れを聞いてうれしく思い、二人は徐々に交際を深めていくようになるのであった。

二人の交際が始まり三年の月日がたったある秋の末頃、薫はいつものように宇治に訪れる。霧深く、荒々しい風が吹く宇治の夜。八宮邸に近づく薫の耳には、ふと「そのこととも聞き分かれぬものの音ども」が、土地柄でもあろうか、「いとすごげ」に響いてくるのである。

【場面一】

近くなるほどに、そのこととも聞き分かれぬものの音ども、いとすごげに聞こゆ。常にかく遊びたまふと聞くを、ついでなくて、宮の御琴の音の名高きも、え聞かぬぞかし、よきをりなるべし、と思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや、耳馴れぬここちして、掻き返す撥の音も、ものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、たえだえ聞こゆ。

（橋姫6・二七三）

前々から聞きたいと思っていた八宮の演奏が聞けるのではないかと期待する薫はさらに耳を傾ける。しかし、そこに八宮の「琴の音」はない。その代わりに「ものきよげにおもしろ」く聞こえる琵琶の音と「たえだえ」にしか聞こえてこない箏の琴の音だけが響いてくるのであった。結局、八宮の琴

の演奏を聞きたいといった薫の望みは叶えられることはないものの、これまでは「世の常の女しくなよびたるかた」は劣っているだろうと期待もしていなかった姫君たちの意外な一面を知ることとなり、薫の興味は一転する。ついには姫君たちの姿をかいま見までしてしまうのであった。

薫と姫君たちとの交際もその日から始まる。そして、その交際を知って喜んだのは何を隠そう父八宮であった。

宮にも、かく御消息ありきなど、人々聞こえさせ御覧ぜさすれば、「何かは。懸想だちてもてないたまはむも、なかなかうたてあらむ。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむのちもなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまひけり。

（橋姫6・二八八）

八宮にはある心配事があった。それは自分の死後の娘たちの処置についてである。八宮は薫と「法の友」としての親密な交際を経た結果、「例の若人に似ぬ」彼に、是非自分の願いを聞いて欲しいと考えていたようなのだ。「亡からむのちもなど、一言うちほのめかしてしかば」という言葉は、つまりそのことを指していると考えられるのだが、「うちほのめかす」と言っていることからもわかるように、まだ八宮は本当の気持ちを具体的に薫に伝えたわけではない。その願いがはっきりとした形で示されるのは、薫が次に宇治へ訪れた時である。その年の十月「五六日のほど」に、薫は再び宇治へ訪れ、八宮と合奏をする。この場面は重要な所なので、多少長いがそのまま引用する。

【場面二】

明けがた近くなりぬらむと思ふほどに、ありししのめ思ひ出でられて、琴の音のあはれなることのついでつくり出でて、①「さきのたびの霧にまどはされはべりし曙に、いとめづらしきものの音、一声うけたまはりし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」など聞こえたまふ。「色をも香をも思ひ捨ててしのち、昔聞きしことも皆忘れてなむ」とのたまへど、②人召して琴取り寄せて、「いとつきなくなりにたりや。しるべするものの音につけてなむ、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそそのかしたまふ。取りて調べたまふ。「さらにほのかに聞きはべりし、同じものとも思うたまへられざりけり。御琴の響きからにやとこそ思うたまへしか」とて、心解けても掻きたてたまはず。③「いで、あなさがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、何処よりかここまでは伝はり来む。あるまじき御ことなり」とて、琴掻きならしたまへる、いとあはれに心すごし。かたへは、峰の松風のもてはやすなるべし。④いとただたどしげにおぼめきたまひて、心ばへある手ひとつばかりにてやめたまひつ。

「このわたりに、おぼえなくて、をりをりほのめく箏の

琴の音こそ、心得たるにや、と聞くをりはべれど、心とどめてなどもあらで、久しうなりにけりや。心にまかせて、おのおの掻きならすべかめるは、川波ばかりや打ち合はすらむ。論なう、ものの用にすばかりの拍子なども、とまらじとなむおぼえはべる」とて、⑤「掻き鳴らしたまへ」と、あなたに聞こえたまへど、思ひ寄らざりしひとりごとを聞きたまひけむだにあるものを、いとかたはならむ、とひき入りつつ、皆聞きたまはず。たびたびそそのかしたまへど、とかく聞こえすさびてやみたまひぬめれば、いとくちをしうおぼゆ。　（橋姫6・二九一～）

では、この場面の内容を具体的に追っていく。まず、①薫が「さきのたびの霧にまどはされはべりし曙に、いとめづらしきものの音、一声うけたまはりし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」と、以前聞いた【場面一】での姫君たちの演奏を話題に出し、八宮に対して琴の琴を催促をしている。②そこで、八宮は琴の琴を手にし、薫には琵琶を勧めた。薫はとりあえず琵琶を掻き鳴らすがそれでは納得しない。彼は是非姫君が弾く琵琶を聞きたいと言い出すのだ。これは薫が先日姫君たちの合奏を聞いた時、彼の耳には琵琶の音の方が強く響いていたことと関係しているといっていい。つまり、この場面においては、案外、薫が聞きたかったのは八宮の琴の琴よりも、琵琶の音であったということである。③しかし、なぜか八宮は薫の要求をかわし、琴の琴を掻き鳴らす。④その後、彼は演奏を止め「このわたりに、おぼえなくて、をりをりほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにや、と聞くをりはべれど、心とどめてなどもあらで、久しうなりにけりや。」と言って、⑤姫君に演奏するように勧めるが、結局弾かなかったという内容になっている。

この場面で最も注目すべきは、④「箏の琴の音こそ」が一体誰を指しているのかという点である。この問題に関して、これまでの諸注釈では「箏の琴の音」の主は中君であるというもの、または中君・大君の特定のどちらかを指しているのではなく、二人のことを意味しているというものの二つに解釈が分かれている。しかし、他の箇所にも人々の噂という形で「いとをかしげにこそものしたまふなれ。箏の琴上手にて、故宮の明け暮れ遊びならはしたまひければ」（総角7・七九）とあるように、箏の琴の音がすばらしいことはいわば物語内の事実であり、その事実は先の琵琶ではなく箏の琴を特別誉めた八宮の受け答えと全く矛盾しない。しかも、「箏の琴の音こそ」とあえて強調していることを考慮しても、八宮がそれを演奏する特定の人物を念頭に置いて話していることは明らかである。実は、その言葉にこそ八宮の意図ともいうべきものが隠されているのだ。

ところで、この「箏の琴の音こそ」という言葉に隠された八宮の意図、ならびに本論後半に触れる「橋姫」巻の薫のかいま見の場面については、既にすぐれた考察がなされてい

る。西耕生氏「「ものの音めづる」心―大君をとりまく人びと」（「中古文学」一九九一・五）がそれである。西論文では、これまで指摘されなかった八宮の意図、そしてその意図が大君に忠実に受け継がれている点を明確に浮かび上がらせることに成功している。しかしながら、当然西論文には論者と解釈の異なる箇所を見出すことができる。以後、適宜西論文を視野に入れながら、卑見を展開していくこととする。

さて、「箏の琴の音こそ」についてであるが、西氏は【場面二】以前に八宮が大君に琵琶を、中君には箏の琴を与えた（橋姫6・二六一）とあることを踏まえ、「「心得たる」「箏の琴の音」とは即ち、薫に対して中の君を引立てようとする八の宮の意図を見出すべきであろう」と断言している。この西説は概ね承認されるべきであろう。[3]先にも述べたように、箏の琴の演奏がすばらしいことは物語内の事実であり、八宮が「箏の琴の音こそ」と言った場合、彼の意識としてはその演奏者が中君であることは間違いなく、当然⑤八宮が箏の琴を弾くように勧めたのも中君に違いない。従来の解釈の問題点は、この後の展開に見られる薫と大君の関係を必要以上に重視しすぎるあまり、無関係な部分をも無理に薫―大君に収束させようとした点にあるのだ。

しかし、ただ一つだけ気になるのは、西論文の「薫に対して中の君を引立てようとする八の宮の意図」の中の「引立て」るという一句である。少なくとも西論文では、薫と中君に関する八宮の意図として「結婚」という語は用られていないが、論者は八宮の意図について、あえて「結婚」の意までも読み込んでいきたい。

八宮の意図を読み取るポイントは「合奏」にある。【場面二】では、八宮は薫に琵琶、中君に箏の琴を与え合奏を試みているが、まずこの「合奏」の前提として、先にも挙げた彼が大君に琵琶を、中君には箏の琴を与え常に合奏させていることが意識されていること、つまり、この場面では八宮が姫君たちにさせているのと全く同じパターンの合奏を、今自分の目の前で中君と薫によって作り出そうとしていることを押さえなくてはならない。また、八宮はそうすることで、薫にあえて中君とのパートナー意識を芽生えさせようとしていることも見逃すことはできないだろう。いうまでもなく、この合奏のパートナー意識とは結婚の相手という意識をも含ませている。

合奏と結婚の関わりについては、「明石」巻における明石入道と源氏の合奏の場面（明石2・二七五～）にも同じことがいえよう。須磨・明石に退去した源氏は明石入道と知り合う。明石入道は自分の娘をなんとしてでも源氏と縁づけたいという願望から、源氏に娘をさりげなく売り込もうとするのである。この場面では、まず「久しう手触れたまはぬ琴」を掻き鳴らす源氏を前に、明石入道は琵琶と箏の琴を取り寄せ、自らは琵琶を演奏し、源氏に箏の琴を与える。箏の琴を手にし

た源氏は「これは、女の、なつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそ、をかしけれ」と箏の琴に関する一般論を述べるが、明石入道はそれを受け、自らの箏の琴の奏法が「延喜の御手」を伝える正統性を有していること、そしてその正統性がそのまま娘に伝授されていることを主張する。更に今自らが手にしている琵琶についても「琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、いにしへも難うはべりしを、をさをさ、とどこほることなう、なつかしき手など、筋異になむ。……」と娘がいかに上手に弾くかを述べている。ここで注目すべきは、自分の演奏と娘の演奏が全く同じであることを明石入道がしつこく強調している点にある。彼はそうすることで、自分の演奏に娘をイメージさせる要素を加えていると考えられるだろう。すなわち、彼は源氏の前で演奏することで、実際にはこの場にいない明石姫君を源氏の目の前に浮かび上がらせようとしているのであり、合奏の構図から見ても、源氏のパートナーは入道ではなく娘なのだということを源氏に想起させることになる。また、明石入道が源氏にこの場面であえて娘を合奏のパートナーとして意識させているのも、もちろんそれだけに目的があるのではなく、最終的には彼に娘を結婚の相手として意識させようとしていることは明らかなのである。[4]

これで八宮の目的が薫と中君との「結婚」にあることは確認されるが、更に八宮の行動からもう一つの事実を読み取ることできる。もう一度、【場面二】の②で八宮が薫に琵琶を勧めたことを思い出して欲しい。何度も確認したように、本来八宮にとって琵琶は大君のものであった。つまり、ここで薫に琵琶を与えるというのは、結果的に大君をこの合奏の場から排除することを意味するのであり、よって八宮には初めから大君のことは念頭になかったということもいえるのではないだろうか。

これらの八宮の意図は、次に示す【場面二】の直後に描かれる八宮の薫に対する一回目の「依頼」の言葉に結集される。

「人にだにいかで知らせじと、はぐくみ過ぐせど、今日明日とも知らぬ身の残り少なさに、さすがに行く末遠き人は、落ちあふれてさすらへむこと、これのみこそ、げに世を離れむ際のほだしなりけれ」（橋姫6・二九三）

この一回目の「依頼」とは、薫に中君との結婚を望んでいるものに他ならない。[5]「さすがに行く末遠き人」と後見の対象が単数形であるのもそのためであろう。[6]結局、八宮は薫に中君の婿になってもらいたい、その願いをはっきり薫に述べていると考えられるのである。もちろん、その願いとは、それまでにも「うちほのめか」していた願いに他ならない。

ただ、ここで注意しておきたいのは、八宮にとって中君と薫の結婚は、大君の幸福にもつながると考えられていたことである。

一所一所世に住みつきたまふよすがあらば、それを見

ゆづるかたになぐさめおくべきを、……

（椎本6・三一三）

「姫君たちのうちどちらかお一人が、この世に暮らしていけるような拠り所があるならば、その方に（もう一人の姫君を）お世話を頼むこととしてとりあえず安心もできるのであるが、……」[7]という述懐を見る限り、八宮にとって姫君一人の結婚は、もう一人の生活保障をも含めていることがわかる。つまり、この中君の結婚は当然中君の幸福を意味しながら、同時に大君の生活の保障をも含めたものであったのである。先にも述べたように、八宮も親である以上大君も中君も共に大切な存在であったであろう。だが、彼は決して中君の幸福だけに拘わっていたわけではない。あくまでも姫君二人の幸福を望んでいたからこそ中君を薫に託そうとしたのであり、また姫君たちの結婚相手に対して大君の生活保障までも期待していたからこそ薫を選んだのだと考えられる。しかも興味深いのは、この八宮の判断が北の方の遺言と実に見事なまでに符合しているということなのである。

## 三

八宮が薫に中君との結婚を申し込むに至るまでの前提として無視できないのは、八宮と薫の間には決定的な「誤解」があったということである。次に示すのは、八宮・薫が初めて宇治に訪れた時のそれぞれの第一印象である。

網代のけはひ近く、耳かしかましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬかたもあれど、いかがはせむ。

（橋姫6・二六三）

同じき山里といへど、さるかたにて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、いと荒ましき水の音波の響きに、もの忘れうちし、夜など、心解けて夢をだに見るべきほどもなげに、すごく吹き払ひたり。（橋姫6・二六九）

宇治に対する二人の第一印象の類似については、これまでにも多く指摘されているが、ポイントは二人が共に宇治の「川」の音に対して拒否感を示しているということ、またそれが「聖」に徹しきれない二人の「俗」的な弱さを象徴しているということにある。[8]簡単にいえば、彼らは共に宇治に足を踏み入れた瞬間、自らが「俗」でしかないことを自覚してしまったのだ。しかも注目すべきは、彼らは自らの「俗」性を自覚すればするほど、相手を「聖」として理想化してしまうことにある。なるほど、権力争いに巻き込まれ、世の中から「あいなく」捨てられた結果「道心」を起こさざるをえなかった八宮にとって、何事も不満に思うはずもない身分でありながら「道心」を求めようとする薫が、逆に薫にとっては「いと荒ましき水の音波の響き」や、「心解けて夢をだに」見ることもできないと感じられるような風の音が「すごく」吹く宇治に住んでいる八宮が、それぞれ「わが得がたき模範」[9]

として映るのも無理はないのかもしれない。この二人の関係について、原岡文子氏が「一つの錯誤の上に築かれた空中楼閣」[10]と称しているように、この二人の間には決して埋めることのできない「誤解」があり、その「誤解」こそが彼らをつなぐ最大要素となっていることだけは間違いない。

こうした「誤解」のもとに、薫と交際するようになった八宮は、心の中で薫を普通の人とは決定的に違う人物として作り上げていく。薫からの大君への文に対しても「何かは。懸想だちてもてないたまはむも、なかなかうたてあらむ。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむのちもなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」(橋姫6・二八八)と述べているように、「例の若人」のように薫を見てはいなかった。また、そうであったからこそ八宮は彼に中君との結婚を申し込んだのである。しかし、薫はそれを断った。

「わざとの御後見だち、はかばかしき筋にははべらずとも、うとうとしからずおぼしめされむとなむ思うたまふる。しばしもながらへはべらむ命のほどは、一言も、かくうち出で聞こえさせてむさまを、違へはべるまじくなむ」など申したまへば、「いとうれしきこと」とおぼしのたまふ。

(橋姫6・二九四)

薫の言う「わざとの御後見だち、はかばかしき筋にははべらずとも」という言葉には、暗に婿としての立場を拒否するという意図を含んでいる。[11]しかも、それは単なる拒否というだけではなく、結婚はしないが、そうではない形で後見をするという、いかにも薫らしい「特殊」な答えだったのである。[12]つまり、薫はあくまでも道心に目覚めた人物として、そして「世の中に何の執着も持ちたくない」という姿勢で八宮に対処したのだ。それを聞いた八宮の「いとうれしきこと」という言葉には、申し出を断られたことの残念さは感じられるものの、それ以上に「例の若人」とは違った薫の「特殊」な返事に何の疑惑も持たず、ただ薫の好意として解釈している姿が窺えるだろう。ただし、ここで八宮の願いが挫折に終わってしまったことは、今更確認するまでもない。

この後、八宮は姫君たちの「御ありさま」を見るにつけ、彼女たちをこのまま一生独身で過ごさせることを残念には思うものの、薫に結婚の申し出を断られた今となっては、もはや彼を「近きゆかり」としたいという願望はなくなってしまう。まして、他の男性と姫君たちの結婚などは全く考えてもいないことが、彼の述懐から窺えよう(椎本6・三〇七)。このような気持ちの変化は、そのまま彼の薫に対する二回目の「依頼」の言葉に表現の変化として現れることになる。「重くつつしみたまふべき年」であった八宮は、姫君たちの将来に対する不安と自らの残り少なくなった余生の悟りから、薫に最後の願いを託す。

「亡からむのち、この君たちを、さるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものに数まへたまへ」など、

おもむけつつ聞こえたまへば、……　（椎本6・三一四）

この「依頼」では、先程は「さすがに行く末遠き人」と単数であった後見の対象が「この君たちを」というふうに複数形に変化していることがわかるであろう。この言葉の変化は、既に八宮が薫と中君との結婚を諦めており、薫に求めている後見も「結婚」を意味しない「後見」に変化していることを暗示しているに他ならない。よって、後見の対象は一人である必要もなく、姉妹二人になっているのだと結論づけることができるのである。[13]

## 四

このように八宮の一連の行為や言説の中には、北の方の遺言による「使命」の遂行といった明確な目的意識が隠されており、その目的意識が具体化したものが二度にわたる薫への「依頼」なのだということが明らかになったが、それはあくまでも八宮にとってという限定つきの問題であることを忘れてはならない。要するに、薫が八宮の二度の「依頼」を承諾したからといって、必ずしも八宮の意図を理解していたということにはならないのである。今まで見てきたように、八宮は明らかに中君を薫と結婚させたいと思っていた。それにも関わらず、薫はこの後一貫して大君を思慕し続けるのである。もし、八宮の願いが薫に通じていたならば、彼の意向に背くことについて薫がなんらかのコメントを残していてもいいと思われるのだが、彼にそういった意識が少しも見当たらないことも事実なのだ。

また、従来の研究を振り返ってみると、薫がどうして大君を恋の相手に選んだのかということ[14]、そしてそれ以前に薫がこの姉妹のうち大君を個人として意識しだしたのがいつのことなのか明らかでないとの意見でほぼ一致しており、大君思慕が始まった時期は「椎本」巻の終わり近くであるとか、「総角」巻であるとの諸説までも生まれている。[15]確かに薫と大君の間には性格上の一致という要素が関わっており、その結果この二人がクローズアップされていくのだが、原因はもっと根本的なところにあり、同時にその原因がどうして大君と薫が結ばれることがなかったのかという問題までも解決してくれるのではないかと考える。

再び西氏の意見に耳を傾けることとしよう。西氏は薫の大君思慕の原因について、薫が宇治の姫君の姿を「初めて」かいま見た場面で、彼女たちが本来とは逆の楽器を演奏していたことにあると述べている。では、そのかいま見の場面を見てみる。

内なる人一人、柱に少しゐ隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても、月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる

顔、いみじくらうたげににほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。

（橋姫6・二七五）

薫が音の主たちの姿が見えるであろう透垣の戸をほんの少し開けると、そこには二人の姫君たちが会話をしている姿が現れてくる。一人は、「琵琶」を前に柱の陰に少し隠れて座っている「いみじくらうたげににほひやか」な姫君。もう一人の姫君は「琴の上に傾きかか」っている「今少し重りかによしづ」いた人であった。当然後者の琴とは「箏の琴」である。注意すべきは、ここで姫君たちが弾いている楽器が本来八宮から教えられた楽器とは逆になっているということである。そのことは、他の箇所で八宮の視点から大君は「らうらうじく、深く重りかに見えたまふ」、中君は「おほどかにらうたげなるさまして、ものづつみしたるけはひに、いとうつくしう」（橋姫6・二五九）とされている人物造型をこの場面に適用すれば容易に導き出せる。つまり、このかいま見の場面における人物と楽器の関係については、琵琶が中君、箏の琴が大君ということになるのだ。[16] 西氏はこの場面が「薫の姉妹を初めて垣間見る場面であるという素朴な事実に思いあたるとき、この逆の取合せが、姉妹と薫の関わる以後の展開においてすこぶる重要な意味を有つ」と述べ、「竹河」巻で箏の琴を演奏した玉鬘大君に想いを寄せた薫であったがために、「初めて」姫君たちをかいま見した時に、たまたまその「心魅かれる箏の琴を前に」していた大君を思慕することになった。つまり、薫の大君思慕はかいま見の場面から始まっていると断じているのであり、「総角」巻での薫と大君の一度目の逢瀬の場面で、薫が「かのものの音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさま」を大君に告白した（総角7・二三）とあることもその根拠と考えているが、卑見はこの説を取らない。

その理由として、西氏はこのかいま見における薫にとって「箏の琴」という楽器が特別な意味を持ち、その楽器故に彼は大君思慕へと導かれていると指摘しているが、実際には薫の意識の中に「箏の琴」を介して玉鬘大君と大君のイメージが連結されている箇所を見出すことができない。例えば、西氏は「冷泉院によってよく教えられた箏の琴を弾く玉鬘大君に薫が心をとめる、という構図」と「八の宮によって教えられた箏の琴を弾く姫君を垣間見て薫が心ひかれるという橋姫巻の構図」の一致を重要視し、その傍証として「竹河」巻末で玉鬘と会話する薫が彼女の様子から「御息所も、かやうにぞおはすべかめる、宇治の姫君の心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかし、と思ひゐたまへり」（竹河6・二四八）というように、玉鬘→御息所（玉鬘大君）→宇治の姫君へと連想していく場面を取り上げている。しかし、

この場面の薫の意識の推移は「箏の琴」を媒介としたものでは決してなく、玉鬘の人物造型を起因としたものであるはずであり、この例から箏の琴―玉鬘大君→箏の琴―大君を読み取るとする西氏の指摘は適当でないといえよう。また、この薫の意識の推移が玉鬘の人物造型を起因とするものである限り、藤本勝義氏が「宇治中君造型―古代文学に於けるヒロインの系譜」（「国語と国文学」一九八〇・一）で指摘するように、ここでの「宇治の姫君」は中君でなくてはならず、西氏の指摘の根拠は完全に崩れてしまうことになるのだ。[11]

確かに、かいま見の場面が薫の宇治の姫君たちを見た「初めて」の場面であることは重要である。しかし、それは冷泉院の所で阿闍梨から八宮の存在を知らされた時（橋姫6・二六六）にも、ただ姫君たちの琴の演奏がすばらしいことしか聞かされなかった薫にとっては、このかいま見の場面が姫君と楽器の属性を知る唯一の場面であったという意味においてでしかない。その結果、薫の意識の中には、八宮が定めた琵琶が大君、箏の琴が中君という属性とは逆の属性が植え付けられてしまうのである。

また、少なくともかいま見直後に、薫の大君思慕を見ることはできない。かいま見の後、薫は弁の尼に会い、次に大君と歌を交わすが、そこでの述懐にも彼の興味は「この姫君たち」と複数形になっており（橋姫6・二八三）、この時点では姫君たちの特定のどちらかに心が動かされているようには見えない。むしろ、薫の意識は弁の尼からほのめかされた自らの出生の秘密に向けられており、帰京後、匂宮の所に参上し宇治の姫君のすばらしさを告げ語っている場面でも「心のうちには、かの古人のほのめかしし筋などの、いとどうちおどろかれてものあはれなるに、をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり」（橋姫6・二九〇）としか描かれてはいない。では、薫の大君思慕が決定づけられたのは何時だろうか。答えは、八宮が「箏の琴の音こそ」と口にした瞬間である。

## 五

再びかいま見の直前である【場面一】を振り返ってみる。この場面で注目すべきは、薫の耳にはまず琵琶の音が、その後で箏の琴の音が「たえだえ」に響いていたとあるように、琵琶の音がより強く響いていたという点にある。その印象の強さは【場面二】の②で薫が是非姫君の弾く琵琶を聞きたいと八宮に要求していることからも窺えよう。要するに、最初の段階における薫の意識としては、あくまでも琵琶の音の方に心惹かれていたのだ。

また、この場面を別の視点から考察するならば、物語は琵琶と箏の琴を薫の耳で比較させることで、薫と結ばれるべき「運命」にあるのは琵琶の奏者であると示しているといえる

のではないか。ならば、その琵琶の奏者は誰なのか。その答えは例のかいま見の場面に示されている。〈琵琶の奏者は中君である〉と。物語はこのかいま見の場面において、【場面一】で薫の耳に琵琶の音が大きく感じられたのは、その奏者が中君であったからであり、必然的に薫の恋の相手も中君でなくてはならないことをはっきりと示しているのである。しかも、この事実は「橋姫」巻冒頭の北の方の遺言、八宮の薫に対する一度目の「依頼」と何ら矛盾しないのだ。

ただし、物語内でただ一人その「運命」から逸脱してしまう人物がいる。それが薫である。先にも述べたように、もともと【場面二】の②で、薫は八宮に対し琵琶の音を要求していることから、この時点までは彼も未だ中君と結ばれるべき「運命」にあったことは間違いない。しかし、八宮の「箏の琴の音こそ」という言葉を機に、薫の「運命」は大きく狂い出すのだ。なぜなら、西氏が指摘するように、八宮と薫の間には「姉妹とその楽器をめぐって微妙なくいちがいがある」。つまり、八宮にとっては中君を指す「箏の琴」が、例のかいま見の場面で本来とは逆の楽器を弾く姫君たちの姿を見てしまった薫にとっては、「箏の琴」は大君を意味するものに他ならなかったからだ。ただ、この場面で注目すべきは、西氏の指摘する楽器に纏わる二人の間の認識のズレにだけあるのではない。重要なのは、それまでは琵琶の主に向けられていた薫の興味が、「箏の琴の音こそ」という八宮の言葉を聞いた瞬間に箏の琴の音の主である大君に向けられたことにあるのだ。それは彼の恋愛に対する態度に深く関わっている。

さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしながらむことなどは、まして思ひ寄るべくもあらず。（匂宮6・一七三）

「人のゆるし」、つまり親の許しのなさそうな結婚など思いも寄らないと語り手に評される薫。また「竹河」巻では玉鬘大君への思慕に苦しむ蔵人少将の姿を見て「苦しげや、人のゆるさぬこと思ひはじめむは、罪深かるべきわざかな」（竹河6・二一〇）と思う薫だからこそ、八宮の言葉は非常に深い意味を持ってくる。薫にとって、この八宮の「箏の琴の音こそ」という言葉は、まさに「人のゆるし」に他ならない。薫の意識としては、八宮は自分に対して大君との結婚を「依頼」しているのであり、だからこそ彼も箏の琴＝大君を恋の相手として選んだということになるのだ。

以後、この薫の誤解は決して解消されることはない。【場面二】直後に八宮が中君に対し箏の琴を勧める場面が描かれているが、彼女は決してその琴を弾くことはなかった[18]。ここで中君が箏の琴を演奏しないことも、薫の誤解を更に増長させていく原因となっていると言えるのではないだろうか。というのも、初めて二人の演奏を聴いた【場面一】を見てもわかるように、琵琶の音と箏の琴の音は明らかに特徴に差があった。だから、もしここで中君の箏の琴の音を聞いていた

ならば、あの時の箏の琴の音色とは違うことに気がついたかもしれないのである。「椎本」巻にある二つ目の遺言の後にも、八宮は薫の要望に応え同じように娘たちに箏の琴を勧める場面（椎本6・三一六）がある。そこでもやはり箏の琴が出てくるが、先程とは異なり「いとほのか」に音が聞こえてはくる。しかし、この琴を一体誰が演奏していたのかは明らかにされないのである。考えようによっては、この演奏は薫に対する物語からの最後のヒントだったのかもしれないのだ。[19]

結論としては次のようになる。まず、北の方の遺言も八宮の遺言も中君を大君よりも大切にするという点で一致していた。琴の演奏が聞こえる【場面一】でも楽器の属性は異なってはいたが、琵琶の奏者である中君の方が存在感を持って薫の前に現れていた。つまり、物語は薫が結ばれるべき女性は中君なのだと明言しているのである。しかし、薫はあのかいま見の場面で、姫君たちが楽器を取り替えていたために、箏の琴の奏者である大君と結ばれなくてはならないという必然性を自らに課してしまうのである。しかも、その必然性は、姫君たちに楽器を教え与えた張本人である八宮の「箏の琴の音こそ」という言葉によって保障されてしまったのだ。

後に中君を自分の代わりに薫と結婚させようと決意した大君は、薫の二度目の侵入の際に自らは部屋から脱出し、薫と中君を結びつけようと試みたという場面がある。何も知らない薫は、部屋の中で寝ている姫君がまさか中君だとは思いも寄らず嬉しく思う。が、だんだんとその姫君が大君でないことに気づいていく。あまりのことに呆然とする中君を見るにつけ、事情を知らなかったであろう彼女を気の毒に思いながらも、逃げ隠れた大君の冷淡さに対する忌々しさから、あえて中君と契りを交わそうとはしない。

これをもよそのものとはえ思ひ放つまじけれど、なほ本意の違はむ、くちをしくて、うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ、この一ふしはなほ過ぐして、つひに宿世のがれずは、こなたざまにならむも、何かは異人のやうにやは、と思ひさまして、例の、をかしくなつかしきさまにかたらひて明かしたまひつ。（総角7・三九）

なぜなら、薫にとっては「箏の琴」である大君と結ばれることが「本意」であったからである。更に薫は思う。「それでも、もしどうしても宿世があるならば、この中君と結ばれようとも、……」。この述懐が、たとえ無意識であるとはいえ、自分が中君と結ばれることを「宿世」としていることは、宇治十帖における薫の主題を考える上であまりにも象徴的であるといえよう。薫はかいま見から生じた誤解としての「本意」＝大君思慕を果たすために、今自分の意志で中君と結ばれるべき「宿世」から逸脱しようとしているのだ。

最後に、薫がかいま見をした直後の述懐にも触れておく。

昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざ

りけむと、憎くおしはからるるを、げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。

（橋姫6・二七六）

琴の音に引かれてかいま見までしてしまった薫は、若い女房から聞いた「昔物語」を意識する。[20] 彼は今まさに自分自身を昔物語の中の一人物としてとらえているのであり、同時に目に見えない力の中に取り込まれていくような錯覚に陥っているのだ。しかし、実際に彼を規制しているものは「昔物語」の類型、つまり、ここでは中君と結ばれるべき「宿世」ではなく、かいま見から生じた誤解としての「本意」であったのである。彼は完全に誤解している。ただ自分が「昔物語」に促されていて、このままその流れに身を委ねても仕方がないのだと、恋に走る可能性を秘めた自己を正当化してしまうのである。

次稿では、本論の最後に論じた「宿世」と「本意」の語を中心に、物語から孤立したために大君・中君・浮舟へと決して実ることのない恋を求め続ける薫の姿について考えていきたい。

※引用本文は、『新潮日本古典集成』により、巻名・冊番号・頁数を記した。

注

(1) 桐壺更衣の遺言については、藤井貞和「予言は実現するか」（『源氏物語入門』講談社学術文庫　一九九六）、吉海直人「注釈編」（『源氏物語の視覚』翰林書房　一九九二）など多数あり。

(2) (1) の藤井氏の論文に同じ。

(3) 坂本和子氏（「八の宮」『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣　一九八三）も、「八の宮は、故北の方の『たゞ、この君をば、形見に見給ひて、あはれとおぼせ』との遺言の故に、どちらかといえば中の君に対して大君に勝る愛情を注いでいたようだ」と述べているように、八宮に北の方の遺言の力が働いていること、さらに「山荘で宮と共に合奏した薫が、姫君達の演奏を話題にした時も、宮は『箏の琴の音こそ、心得たるにや』と言って、中の君を紹介している」と指摘しているが、坂本氏はその二つのつながりについて、それほど注目していないようだ。

(4) しかし、この場面は明石入道が琵琶を自ら手にし、箏の琴を源氏に渡すことで〈琵琶〉―〈箏の琴〉という合奏形式を創りだし、そうすることで薫に結婚のパートナー意識を持たせているのだと単純に考えてはいけない。というのも、まず第一にこの場面は琵琶と箏の琴の合奏というものが本当の目的ではないと考えられるからである。明石入道はあくまでも源氏の弾く琴の音に導かれてやってきたのだということを考慮に入れてみても、やはりここでは源氏が最初に弾いていた琴の琴の存在を忘れてはならないだろう。現に、源氏が京に戻る際に、源氏は琴の琴を手にし、明石姫君は入道から箏の琴を渡され〈琴の琴〉―〈箏の琴〉という合奏が実現されていることからも、その意味は見逃すことはできない

のである。つまり、この場面で明石入道が意図していたのは、琵琶または箏の琴がそのまま明石姫君をイメージさせるといった楽器と人物の直接的な属性を源氏の意識に植え付けることであり、また結婚相手として意識させることに他ならない。明石入道が、先程の宇治八宮のように琵琶ではなく箏の琴を……というように一方の楽器を持ち上げるのではなく、二つの楽器に関してコメントを残しているのは、明石姫君が琵琶と箏の琴の二つを演奏することができるという属性の違いがあったことの結果に過ぎないのである。

(5)「結婚」という意図については、武原弘「大君の世界」(『源氏物語の探究　第二輯』風間書房　一九七六)、高橋亨「大君の結婚拒否」(『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣　一九八三)、加藤洋介「「後見」攷―源氏物語論のために―」(『名古屋大学国語国文学」　一九八八・一二)など多数あり。

(6)「さすがに行く末遠き人」に関しては、他の諸注はすべて複数で解釈している。しかし、「行く末遠き人」という語に関しては、『源氏物語』の中でもう一カ所使われている。それは「柏木」巻にあるのだが、そこでは「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりてことの乱れあり、世の人にそしらるるやうありぬべき」(柏木5・二八一)というように、朱雀院が娘である女三宮だけを「行く末遠き人」と表現しているのである。この「柏木」巻の用法と「橋姫」巻の用法が極めて類似していることからを考え合わせてみても、この「行く末遠き人」を単数に解釈することは決して不可能ではないだろう。なお、「柏木」巻の用法については、一九九六年九月七日に行われた北陸古典研究会の発表席上で、田村俊介氏にご教授いただいた。

(7)『本居宣長全集』第四巻(筑摩書房　一九六九)「ひとり〳〵といふと同じことにて、姉君中ノ君、いづれにまれ、一ところといふ意也、湖月本に、一ところとのみあるは、雅言をしらぬ人の、さかしらにはぶきすてたる也、」

(8)宇治の「川」の音に関する論考としては、小西甚一「源氏物語のイメジェリ」(『解釈と鑑賞』　一九六五・一八)をはじめとして、原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮」(『源氏物語　両義の糸』有精堂　一九九一)、小嶋菜温子「〈喩〉としての音」(『源氏物語批評』有精堂　一九九五)、三田村雅子「〈音〉を聞く人々」(『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六)などが挙げられる。

(9)秋山虔「宇治八宮と薫君」(『日本文学』　一九五六・九)

(10)原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮」(『源氏物語　両義の糸』有精堂　一九九一)

(11)後藤祥子「不義の子の視点」(『源氏物語の史的空間』東京大学出版会　一九八六)。それに対し、高橋和夫氏は(「宇治十帖」『源氏物語の創作過程』右文書房　一九九二)「薫は、御嬢様を私の本妻としては無理ですが、その次ぐらいなら、ぐらいに思って返答したのだろう」と指摘している。つまり、薫は「はかばかしき筋にはべらずとも」という言葉に「妻」としてではなく「愛人」としての「後見」の意味を込めていたということであるが、深読みかと思われる。

(12)増田繁夫「大君の死」(『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣　一九八三)。「若い娘の後見を依頼すること」が結婚を意味する当時において、「薫が結婚という形ではなくても後見するといったのはすこぶる特殊なあり方」であった。

(13) 薫は八宮の「依頼」を快く承諾し、それを聞いた八宮も素直に「うれし」と反応していることから、「俗ながら聖」という共通項を持った二人の心はこの場面で一つになったように見える。ただし、あくまでも「見える」だけなのである。ある意味、この場面は先に見た二人の「誤解」が最も大きくなった場面であると言えよう。そのことは次の薫の述懐に明らかである。

わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり御心もて
ゆるいたまふことの、さしもいそがれぬよ、もて離れてはた
あるまじきこととは、さすがにおぼえず、かやうにてものを
も聞こえかはし、をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情
をも通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、宿世異
にて、ほかざまにもなりたまはむは、さすがにくちをしかる
べう、領じたるここちしけり。　（椎本6・三一八）

薫が「八宮に結婚を認められているのに、急いで結婚しようとしない自分は、やはり普通の人とは違っているのだな」と自らを分析していることからも、彼が二人の姫君たちを自分の所有物として考えていることが窺える。つまり、薫は、八宮にとっては単なる「後見」しか意味しない「君たち」という言葉に、姫君たち二人との「結婚」の許可を読み取っていたことになるのだ。語り手の「領じたるここちしけり」という薫に対する批判は、この二人の意識の相違を一層浮き彫りにしてくれる。

(14) 清水好子「薫創造」（「文学」一九五七・一）。「物語の中では、薫がこれ程大君に執する理由が書かれていない。八宮方に育った姫君達にひかれるのはわかる。だが二人の姉妹のうち、特に大君をえらぶ理由はどこにも見えない」と指摘する。

(15) 森一郎「薫の道心と恋」（『源氏物語の探究　第二輯』風間書房一九七六）、藤村潔「八の宮の遺言」（『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣　一九八三）など。

(16) 姫君と楽器の組み合わせについて、森野正弘氏（「宇治姉妹と箏の琴」「王朝文学史稿」一九九四・二）が纏めているところによると、この場面の解釈にもある程度傾向があるようで、「賀茂真淵や『湖月抄』以前の諸注」では琵琶を大君としており、『孟津抄』そして「吉澤義則氏の『対校源氏物語新釈』以降の諸注」ではすべて中君となっているらしい。また、この問題に関する最近の論としては、篠原義彦「源氏物語の世界（その三）」（「高知日本文学研究」一九八七・一二）、藤井貞和「物語のルール」（『日本文芸史』古代Ⅱ河出書房新社　一九八六）、森野正弘（前掲論文）など多数。

(17) ちなみに、非常に重要な指摘である藤本氏の論については、未だ十分な見解を示すに到っていないため、本論に取り入れることができなかった。しかし、この問題が宇治十帖を考える上で再考すべきものであることは間違いない。

(18) 中川正美氏（「「合わざる」楽の音」「国語と国文学」一九九一・一二）が指摘する合奏不成立の意味を、この場面にも適用できるだろう。

(19) 更に興味深いのは、この後中君が箏の琴を演奏する場面は何度か描かれているにも関わらず、大君が琵琶を演奏する場面が一度も描かれないということである。そのことも、薫の誤解が解かれることのない原因の一つとなっていることに違いないだろう。

また、西氏は「総角」巻での薫と大君の一度目の逢瀬の場面で、薫が「かのものの音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさま」（総角7・二三）を大君に打ち

明けたことで、「橋姫巻における姉妹と楽器の逆転した取合せの齋すくいちがいが、この総角巻の大君と薫の間において解消された」と指摘しているが、これ以後も薫は大君を慕い、大君は中君を薫に縁づけようとする言動に変化は見られない。これは、八宮の「箏の琴の音」がもたらす大君と薫の間のズレは未だ解消されていないことを意味していよう。つまり、八宮の言葉による決定的なズレの存在は、この二人に関しても例外ではないことがここに象徴的に示されるのである。

(20) 高橋亨「大君の結婚拒否」(『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣　一九八三)。高橋氏は、ここで薫が「昔物語」に領道されていく過程を見抜き、更に「昔物語」の類型から逃れようとする大君とのズレが、彼ら二人が結ばれなかった原因だと指摘している。しかし、ここで「昔物語」からはずれていくのは、むしろ薫の方ではないだろうか。

(なかがわ・てるまさ　本学大学院博士後期課程)